

Nara Women's University

日本古典文学における偽書の系譜の研究概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-07-09 キーワード (Ja): 偽書, 系譜, 日本古典文学 キーワード (En): 作成者: 千本, 英史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/543

日本古典文学における偽書の系譜の研究概要

(一) 研究課題及び課題番号

研究課題 日本古典文学における偽書の系譜の研究

課題番号 一二四一〇一一四

(二) 研究種目

科学研究費補助金 基盤研究 (B) (2)

(三) 研究期間

平成十二年度～平成十四年度

(四) 研究経費 交付決定額 (配分額)

	間接経費	合計
平成十二年度	二,九〇〇	二,九〇〇
平成十三年度	二,七〇〇	二,七〇〇
平成十四年度	一,九〇〇	一,九〇〇
総計	七,五〇〇	七,五〇〇

(金額単位：千円)

(五) 研究組織

研究代表者：千本英史 奈良女子大学文学部教授

研究分担者：伊藤 聡 茨城大学人文学部助教授

(平成十四年度から、十三年度まで研究協力者)

大谷 俊太 奈良女子大学大学院人間文化研究科助教授

小川 豊生 摂南大学国際言語文化学部助教授

礪波美和子 奈良女子大学大学院人間文化研究科助手

(平成十三年度から)

深澤 徹 桃山学院大学社会学部教授

柳田 征司 奈良女子大学文学部教授 (平成十三年度まで)

(六) 研究の概要

(A) 研究の目的

「国文学」は二〇世紀に成立した学問大系だった。芳賀矢一の『国文学史十講』が富山房から出版されたのは一八九九年の十二月である。それから百年の長い歳月が過ぎ、研究領域の拡大および深化は、研究方法の多様化とともに、「正当的作品」自体の意味をさわめて不安定な、宙づりな存在とした。かつて旧日本古典文学大系に『親鸞集 日蓮集』(一九六四)が入ったことが「問題」とされたことが、いまとなつてはどこか牧歌的にさえ思われる。

ことは文学の一分野にとどまらない。すべての分野における「正当」なるもの、「標準」なるものの見直しが進み、「正当」と「虚偽」二分割の思考の枠組み自体が問われようとしているといえるだろう。

こうした情況のなかでもう一度、古来の「偽書」の系譜をたどり、それぞれの作品に込められた文学史の力動を再発見し、そのことをと

おしていま一度、「文学」という営為を検証しなおしたいと考えた。

そのためにはまず、思想史的、歴史的文献をも含めて、個々の偽書の体系的把握が必要となる。関心が重層しながらも、多分野にわたる研究者によつて、共同チームを組み、それぞれの分野での偽書を検討し、それぞれの分野の特性を明らかにする。つぎにそこで得られたものうちから、代表的なものを選び、それに注釈作業を行い、さらにその特性を解明する。

これまでの国文学研究は、国学という「科学的」方法を駆使した成果を引き継ぎ、偽書をできる限り排除する方向で進められた。たとえば、戦後まもなく書かれた風巻景次郎の『西行』は、「今日、新しく出発する」ということは、われわれ全部の生活にかかわる問題であつて、したがつてわれわれ全部の思想の更新を内部に含む問題である」という言葉で始まる、国文学の覚醒と新生とを旨指した著作だが、そこで実際になされたことは、『撰集抄』や『西行物語』などの伝説的『西行像』をはず取り、「真性」資料のみに基づいて「真の」西行像を組み立てることにほかならなかつた。

こうした考えに一部で「修正」が見られるようになるのは、一九六〇年代に入つてからである。すなわち西尾光一は、西行仮託の書である『撰集抄』について、「西行仮託の書であること自体が、逆にだんだんおもしろくなり、また文学史の上で意義のある点や問題のある点があつてきつてきたように思う」（岩波文庫解説）と述べている。

偽書の系譜を明らかにすることは「正統」の内実を再度検討しなお

すことであり、さらに新たな「文学」営為の視点の獲得へと繋がるものだと考える。

聖徳太子・蘇我馬子撰という『旧事記』はもとより、日本現存最古の写本『法華義疏』もまた、擬撰が疑われる。この国の書物の歴史は、偽書とともに始まったといつてよい。ほんらい偽書は、「正当」に対する反発、もしくは依拠を、その基本的性格とする。その「反発」や「依拠」そのものを、文学的営みとして捉えかえす。そのことは「世界」の解釈としての「物語」の意味を問い返す作業に連なるはずである。

(B) 研究実績の概要

平成十年春の時点から、具体的な下準備に入り、数回の話合いの会議をもつて、今後のスケジュール等について意見交換するとともに、同時期に、研究分担者である伊藤聡が編集委員を勤める日本文学協会の機関誌『日本文学』四七巻七号（十年七月）で、「偽書」の中世の特集を企画、研究分担者の小川豊生「偽書のトポス—中世における〈本〉の幻像」ほか三本の論文を得て、偽書の可能性について研究者の注意を喚起することができた。

つづいて平成十一年春には、研究分担者である深沢徹が企画担当した、説話伝承学会一九九九年春期大会（桃山学院大学）において、公開シンポジウム「偽書と正典」を開催、同じく小川豊生による「儀礼空間のなかの書物—中世神話と〈偽書〉」ほか、中国の予言書、

クムラン文書（旧約聖書・典外書）についての発表を得、比較検討を深めた。

研究が採択されてからは、速水行道の『偽書叢』自筆写本二巻（早稲田大学図書館蔵）、水戸藩士で後に『古事類苑』の編集にあたった小宮山綏介（一八二九～一八九六）の『偽書考』稿本（国会図書館蔵）の複写を入手して、これまでの研究で明らかにされてきた偽書について、その全体像を検討した。同時に『国書総目録』に「偽書」として指摘される書目を拾い上げるなどして、一応のリストを作った。

以降、それぞれの担当を決めて、その代表的な偽書につきマイクロフィルム・紙焼写真を撮り、具体的な検討を重ねた。

この間、『月刊言語』が平成十二年七月号で「偽書の文化史」と題した特集を組み、また佐藤弘夫氏が平成十四年六月、『偽書の精神史——神仏・異界と交感する中世』（講談社選書メチエ）を上梓されるなど、周辺でも「偽書」に対する注目が集まった。

そうした声に応えるべく、平成十二年には、研究代表者千本英史が所属する奈良女子大学で、「仏教文学会本部例会シンポジウム 中世文人と偽書」を開催（九月十六日）、千本が『阿仏東下り』、武庫川女子大学助教授加賀元子氏が『長明文字鎖』、広島大学助教授竹村信治氏が『兼好諸国物語』について、基礎的研究成果を報告した（千本はその成果を踏まえ翌十三年の「大阪市文学講座へほんものにとせもの」で『阿仏東下り』について、三回にわたって講読講義を行った）。

また年末には、研究分担者の伊藤聡、小川豊生の両名が、「名古屋

大学比較人文学先端研究特別演習シンポジウムへ古代・中世の偽書をめぐって」（十二月二十七日）にゲストパネラーとして参加、研究成果を報告した。

平成十三年は、研究分担者の小川豊生が北京日本学研究中心講師として赴任したことを利用して、同センターで「偽書」に関する日中比較シンポジウム」を企画した。小川を司会とし、千本英史が「鴨長明と偽書——偽書を作る営みとはどういうものか」、研究分担者の深沢徹が「未来騙りのテキスト——愚管抄のウソとマコト」（十一月六日）と題して報告し、センターに学ぶ中国人若手研究者と意見交換を行った。この北京訪問では併せて北京大学附属図書館古籍善本閲覧室で、『三教指帰注』ほか、和書について調査を行なった（研究分担者の伊藤聡・礪波美和子も同行）。また小川は、滞在中に北京大学中文系教授（博士導師）・教育部全国高校（大学）古籍整理研究工作委员会秘書長の楊忠氏と面談し、中国での偽書研究について指導を受けた。

最終年度の平成十四年は、担当作品についての研究を深化させるとともに、新たな展望を期して、研究代表者の千本のもとで「説話文学大会シンポジウムへ未来記の世界」を開催し、立教大学教授小峯和明氏、龍谷大学教授出雲路修氏の基調講演を受け、日本中世史（高橋昌明神戸大学教授）、中国文化史（小南一郎京都大学教授）、キリシタン文学（米井力也大阪外国語大学教授）の各隣接分野からのコメントを得て、その基礎的問題点を整理した（司会は阿部泰郎名古屋大学教授）。九月には、研究分担者の深沢徹、小川豊生の両名が北京を訪れ、

楊忠氏に再度面談し、指導を受けた。

年度末の三月には、研究分担者の伊藤聡、小川豊生、深沢徹、礪波美和子の四名が、フランス、アルザス日本学研究所他の主催になる「パリ・アルザス国際シンポジウム」に参加し、研究発表・交流を行う予定である。

(C) 今後の課題

前述した「月刊言語」の特集や、佐藤弘夫氏の著書でも、いまだ「偽書」は断片的に扱われている段階である。これまでの研究の成果を生かしつつ、早急に「偽書」全体を俯瞰する叢書が提供されることが望ましい。これについてはすでに、科研メンバーを中心に、さらに幅広い研究者に呼びかけて、三〜五巻程度の叢刊の刊行を準備し、原稿も相当部分集まりつつある。諸般の事情から、いまだ第一巻の刊行も遅れている状況であるが、早急に刊行体制を再構築したい。

現在確認できているところでは、秘伝・口伝を特徴とする中世期の「偽書」と平安〜鎌倉の人物に仮託した近世記の「偽書」(擬書)との間には、性格付けに一定の差異がみられる。両者のありようの性格的な断絶と継承の関係を、さらに成立の背後の社会的な視野を加えつつ検討する必要があると思われる。

さらに中国を始めとする周辺諸国の「偽書」との比較検討は、まだ研究の緒にいたばかりである。今後の進展を期したい。

期間中の公刊書籍・論文(抄)

千本英史

- ・「儀礼にみる日本仏教 東大寺・興福寺・薬師寺」法蔵館 十三年三月三十一日 総頁二六六頁 古代学学術研究センター設立準備室編
- ・「沙石集 仏教の教えと物語のはざま」週刊朝日百科「世界の文学」八三号十三年二月二十五日

・「シンポジウム僧伝の系譜」『仏教文学』二五号 十三年三月三十一日

・「中世の「癡者」をめぐる」『部落史学習の深化をめざして 十二年度部落史学習講座のまとめ』十三年三月 三三頁〜四六頁

・「偽書と説話―鴨長明の場合―」『国文学』四六巻一〇号 十三年八月十日 三〇頁〜三六頁

・「日本の仏教第Ⅱ期 日本仏教の文献ガイド」法蔵館 十三年十二月十日 (今昔物語集八四頁〜八七頁、沙石集一二五頁〜一二八頁)

・「しほゆあみの光景」『王朝文学の本質と変容 散文編』和泉書院 十三年十一月二十五日 四五七頁〜四七九頁

・「今昔物語集を学ぶ人のために」世界思想社十五年一月(「鈴鹿本」一三六頁〜二四二頁、「仏法・王法・世俗」二九〇頁〜二九三頁)

・「国文学の研究・教育と「デジタル技法」」『教育と情報』Vol.11 No.3 私立大学情報教育協会(共著) 十五年一月 二二頁〜二三頁

伊藤 聡

- ・『日本史小百科 神道』 共編著 十四年二月 東京堂出版
- ・『仁和寺資料【神道篇】 神道灌頂印信』へ名古屋大学比較人文学研究年報第二集 十二年三月 名古屋大学文学部比較人文学研究室 翻刻・解題 七三頁〜八八頁、一一一頁〜一二二頁、一二三頁〜一四四頁
- ・『大倉精神文化研究所・榊原文庫蔵『無題記』―翻刻と解題』『大倉山論集』四五号 十二年三月 二六一頁〜三三二頁
- ・『沙石集』と中世神道説―冒頭話「太神宮御事」を巡って『説話文学研究』三五号 十二年七月五九頁〜七四頁
- ・〔資料紹介〕國學院大學蔵『神道灌頂授与作法』『堯栄文庫研究紀要』二号 十二年九月 四三頁〜六七頁
- ・『麗氣記』について『国文学』四五卷一二号 十二年十月 八〇頁〜八八頁
- ・『日本の仏教第Ⅱ期日本仏教研究の歴史と方法』法蔵館 十二年十一月（神仏習合 一九二頁〜二〇二頁）
- ・『アマテラスの中世神話』週刊朝日百科「世界の文学」八三号 十三年二月二十五日 七四頁〜七五頁
- ・『猿投神社所蔵の無住撰述『三昧耶戒作法』について』『愛知県史研究』五号 十三年三月 九一頁〜一一一頁
- ・『文治二年東大寺衆徒伊勢参宮と弁暁―金沢文庫保管『大神宮大般若供養』をめぐって』『仏教文学』二五号 十三年三月 四八頁〜六〇頁
- ・『大日本国説について』『日本文学』五〇巻七号 十三年七月 二九頁〜三九頁
- ・『雑書の世界』『国文学』四六卷一〇号 十三年八月 三八頁〜四五頁
- ・院政期文化研究会編『院政期文化論集第一卷 権力と文化』十三年九月 森話社 「梵漢和語同一観の成立基盤」二〇三頁〜二二八頁
- ・『重源と宝珠』『仏教文学』二六号 十四年三月 一〇頁〜二六頁
- ・『中世神道説の類聚―『神代卷秘決』の引用書を巡って』『神道古典研究所紀要』十四年三月 一三頁〜三一頁
- ・『二間観音と天照大神』『日本仏教学会年報』六七号 十四年五月 二一九頁〜二三四頁
- ・『中世密教における神道相承について―特に麗氣灌頂相承血脈をめぐって』『王権と神祇』思文閣出版 十四年六月 二一九頁〜二四三頁
- ・『中世日本における太陽信仰―特に天照大神と愛染明王の習合を巡って』『太陽神の研究』（上巻）リトン 十四年六月 一九一頁〜二〇八頁
- 大谷俊太
- ・『中院通村講・近衛信尋記『百人一首聞書』について』『奈良女子大文学部研究年報』四四号 十二年十二月 二二頁〜三二頁
- ・『寂恵法師歌語』について『大宮武麿氏旧蔵書目録』奈良女子大

学附属図書館 十三年三

・「面白がらするは面白からず―室町・江戸時代の和歌における作為と自然―」『文学』三卷二号 十四年三月 六六頁～七六頁

・「富士を伊達に詠むこと―富士詠の近世」『富士山と日本人』青弓社 十四年五月 一六一頁～一八〇頁

・「げにそらごとぞ鶴の橋―秘することの意味」『江戸文学』二七号 十四年十一月 一二頁～三二頁

・「近世堂上和歌と連歌―『耳底記』を基点として―」『国語国文』七二卷二号(十五年二月刊行予定)

・「テニハ伝受と余情―つつ留り・かな留りをめぐって―」『テニハ秘伝の研究』勉誠出版 一二三頁～一三三頁(十五年三月刊行予定)

小川豊生

・「儀礼空間のなかの書物―中世神話と偽書―」『説話・伝承学』Vol.8 十二年四月 一頁～一二頁

・「幻像の悉曇―梵・漢・和三国言語観をめぐって―」『国文学』四五卷一〇号 十二年八月 八八頁～九五頁

・「文狂」の時代―院政期の宗教言説と偽書の創出―」『院政期文化論集 第一卷 権力と文化』森話社 十三年 一八一頁～二〇二頁

・「日本の仏教第Ⅱ期 日本仏教の文献ガイド」法蔵館 十三年十二月十日 (野守鏡 一九八頁～二〇二頁)

・「直談」考―天台口伝法門のメテオロジー―」『国文学』四六卷

一〇号 十三年八月十日 七頁～一三頁

・「俊成自讃歌の事」と転形期の和歌観」『新しい作品論』へ、へ新しい教材論』へ・古典編』右文書院 十五年一月 一〇三頁～一二二頁

・「今昔物語集を学ぶ人のために」世界思想社 十五年一月(「辺境・異郷・在地」一二九頁～一三六頁、「今は昔」二八八頁)

礪波美和子

・「西行物語」における和歌観をめぐって」『文藝論叢』五六号 十三年三月 一五八頁～一七三頁

・「西行の旅」『ツーリズムの文化研究』京都精華大学創造研究所ライブラリー五 京都精華大学創造研究所 十三年三月 一一八頁～一三八頁

・「伊勢貞丈自筆『西行記画卷物拔書』考―『座右書』及びサントリ―美術館蔵白描西行物語絵巻との比較を通して― 附『西行記画卷物拔書』影印・翻刻」『叙説』三〇号 十四年十二月 三九頁～八四頁

・「国文学の研究・教育と「デジタル技法」」『教育と情報』Vol.11 No.3 私立大学情報教育協会(共著) 十五年一月 二二頁～三三頁

深澤 徹

・「自己言及テキストの系譜学―平安文学をめぐる七つの章段」(単行

著) 森話社 十四年十月 総頁数二八五頁

・「女流日記文学」から「女房日記」へ―「啓蒙的理性」の衰え、もしくは女房集団の文学(下)『日本文学』八五号 十二年

・「テキストの(内)と(外)―蜩巻「物語論」における自己言及のパラドクス」『国文学研究』一三三集 十二年

・「さすらいの旅の果て―『土佐日記』における音声中心主義と、その行方」『系図をよむ/地図をよむ―物語時空論』勉誠出版 十二年

・「紫式部、「倫子女房説」をめぐって―即自的存在者と対自的意識のはざままで」南波浩編『紫式部の方法』笠間書院 十三年十一月 四五七頁〜四六八頁

・「『方丈記』と『愚管抄』の、隠れた争点―安元の大火における「意味付け」の拒否、もしくはその多様化へ向けて」『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ・古典編』右文書院 十五年一月 三二二頁〜三三三頁

・『今昔物語集を学ぶ人のために』世界思想社十五年一月(宮中・平安京) 一一四頁〜一二二頁、「慣用表現・常套表現」三〇三頁〜三〇五頁

柳田征司

・「五音節名詞の東京方言アクセント」『鎌倉時代語研究』一三三号 十二年十月 二二二頁〜二三五頁

・「方向格助詞「サ」・目的格助詞「バ」・形容詞終止形・連体形活用語尾「カ」の方言分布」『国語論究8 国語史の新視点』明治書院 十二年十一月

・「抄物目録稿(原典漢籍経部二 四書・小学)」『抄物の研究』一一号 十二年十一月 一頁〜五七頁

・「抄物関係文献目録(追補二)」『抄物の研究』一一号 十二年十一月 五九頁

・「抄物目録稿(国書一 日本書紀上)」『抄物の研究』一二号 十二年十二月 一頁〜四〇頁

・「抄物目録稿(原典国書 御成敗式目上)」『抄物の研究』一三三号 十三年二月 一頁〜三九頁

・「母音連続の融合と非融合―a+e、V+格助詞「へ(エ)、V+格助詞「を」(オ)の場合―」『国語語彙史の研究』二〇号 十三年三月 一頁〜一〇頁

・「抄物」『訓点語辞典』東京堂出版 十三年八月 一二三頁〜一二五頁

・「母音連続の融合と非融合―今後の課題―」『日本語史研究の課題』武蔵野書院 十三年十月 二九頁〜六三頁

・「ヲリ」(居)の語源』『語源研究』四〇号 十三年十一月 二八頁〜三五頁

・「日本語音韻史」『叙説』二九号 十三年十二月 一頁〜九頁

研究発表・公開講演等(抄)

千本英史

・「阿仏東下り」

仏教文学会本部例会シンポジウム 十二年九月十六日 奈良

・「ほんものにとせもの 阿仏東下り」

大阪市文学講座 十三年二月一日、八日、十五日 大阪

・「鴨長明と偽書―偽書を作る営みとはどういうものか―」

北京日本学研究センター「偽書」に関する日中比較ディスカッ

ション 十三年十一月六日 北京

伊藤 聡

・「重源と宝珠」

仏教文学会大会シンポジウム「仏教説話を問い直す」十三年六月

二日 京都

・名古屋大学比較人文学先端研究特別演習シンポジウム「古代・中世の偽書をめぐって」十二年十二月二十七日 名古屋

大谷俊太

・「近世和歌と連歌―『耳底記』を基点として―」

和歌文学会関西例会 十四年四月 奈良

小川豊生

・名古屋大学比較人文学先端研究特別演習シンポジウム「古代・中世の偽書をめぐって」十二年十二月二十七日 名古屋

深澤 徹

・「未来駆りのテキスト―愚管抄のウソとマコト―」

北京日本学研究センター「偽書」に関する日中比較ディスカッ

ション 十三年十一月六日 北京